



山にも里にも春がきた

3月末から4月の頭、滋賀県北部はいつまでたっても冬の冷たい風が手ごわい…朝晩の寒さが残る…と思っていましたが、5月の連休を前にじんわり汗ばむような日も増えてきました。個人的には寒さが長く残ることは結構好きなのです。テレビや新聞で「サクラが開花！」とワイワイ盛り上がる時期は、私たち寒冷地の人間にとってはなんのこっちゃ期間。その代わりに、寒冷地のサクラはゆっくり、じんわり花開くので、先にワイワイしていた人たちが「サクラも終わりか…」と思う頃にも遅咲きのサクラを長く楽しめるラッキーボーナス期間があるのです。これが、長く続く寒さを耐えた先の幸せです。街中や河原によく咲くソメイヨシノもきれいなのですが、山岳地帯ならではのサクラといえば山桜。毎日目にする集落を囲む山肌、まだまだ冬が残る茶色の木々の中に春を知らせる若葉色が加わり、ある日を境に白っぽい山桜がポツポツ咲いていることを遠目に確認できた時、季節の移り変わりを感じます。



そんな季節の変わり目の4月、5月は自然の中で遊ぶにもってこいの時期！保育士時代から春の自然環境が大好きすぎて、朝の会の前からお花を摘みに出かけ、園庭にシートを広げて給食を食べ、「もうこのままお日様の下でお昼寝しよお～」と半日以上戸外で過ごすことがクラスの定番でした。学生に戻ったこの春は保育現場での自然体験エピソードはお休みですが、スタッフとして活動している「預かり自然体験 dive」での活動の中にあつた様々な出会いを記録します。

春の自然に全身で dive!

4月4日、小春日和だれども、まだまだ風は冷たい日、「預かり自然体験 dive」は滋賀県長浜市内で3日間の春のプログラムの真っ只中でした。「預かり自然体験 dive」（以下 dive）とは保育士が見守る子ども向け自然体験教室。体験を通した子どもの成長と保護者のリフレッシュを応援、「子どもは自然に dive！パパママは自分時間に dive！」できるありそうでなかった自然体験の形です。

（詳細は文末の URL をご覧ください！）主な活動拠点の滋賀県北部の長浜市や米原市。参加者される親子は活動拠点近隣や滋賀県内の方だけでなく、京都、大阪や中には関東圏の方も！代表の「さとみん」こと熊谷理美さんの「自然の中でのびのび、たっぷり自分を解放する子どもたちを、いちばん大事にするよ～」という気持ちが伝わるあたたかい見守

りの姿勢と、働く保護者の方、自然体験に関連する専門家の方など多くの大人とみるみるうちにつながり深めることのできるバリバリキャリア気質な姿勢のバランスが絶妙な方。さとみん人柄に惹かれて参加し、リピートしている方も多いただろうなあと感じながら一緒に活動しています。

この日のメインプログラムは「春の自然に出会おう！」田んぼや野山にいる春の生き物探しを楽しみ、お昼ごはんにはタンポポやヨモギなどを野草の天ぷらにしていadakます。夕方まで参加する子どもたちはヨモギ団子作りも体験できる盛りだくさんな一日です。参加した幼児から中学生の子どもたちは「野草って食べられるの？」「どんな生き物に会えるの？」と朝から春の自然との出会いに興味津々な様子でした。アイスブレイクが終わると、女の子たちはさっそく食材探しに。ポウルやザルを手にさとみんが教えてくれた食べられる野草を探します。田んぼのまわりにはまだまだ小さい葉っぱが多いけど、少し斜面になった日がよく当たる地面には大きくモリモリとした葉っぱがいっぱい！冷たい風に負けそうになっていた子たちも春のイキイキとした自然を見て「大きいタンポポが取りたい！」「ポウルいっぱいになりたい！」とやる気スイッチが入り黙々と野草を摘んでいました。目に入った自然物や友達の姿に感化され、楽しそう、やってみようという純粋に心が動く瞬間は見守っている大人もワクワクします。



タンポポ…ツクシ…ヨモギ…
おいしい春、みつけた！

中学生の男の子は前々から気になっていたノビルという野草を発見。根の部分を丸かじりしたかったのだとか…！この日はスコップがなかったのですが、太い木の枝や大きめの石を駆使して土を掘ります。目的意識のある子どもたちは「やりたい！」と思うことに向かってどんな手立てがいいか、試行錯誤しながら根気強く取り組む姿が印象的です。冷たさの残る土の中から、やっとの思いで親指の爪くらいの大きさのノビルを引き抜くことができた瞬間の彼の顔はパッと晴れやかでした。



採った野草を
机に並べて…
大きさ、種類
色、かたち…
いろんな分け
方ができる！

その子にちょうどいい手ごたえ

保育士時代に受講した自然保育の研修会で耳にした『既存のおもちゃや遊具と違い、自然環境はその子に合った「ちょうどいい手ごたえ」を自分で選んでチャレンジできることが最大の強みである。』という言葉が印象に残っています。木登りを例に考えてみましょう。子どもたち自身が木から伸びる枝の高さ、太さを吟味する中で「ここなら登ることができるかも…！」「登ってみたけど、高すぎて下りるのが怖い…」など自分のレベルに合わせた遊び方を細かく調整することができます。この「できる」「できない」の二択ではなく、「今の」自分がクリアできる絶妙な体験を身をもって選択できる、失敗してもやり方やルートを変え柔軟にチャレンジすることができる環境が、個に合わせた「手ごたえ」に繋がるのではと考えます。

幅広い年齢層の子どもたちが同じフィールドで遊んでいても、誰ひとり飽きることなく

活動に没頭している姿をみて、その時に学んだことが頭によぎりました。この日の活動では小学校中学年の子どもたちが斜面からの飛び降りに挑戦。はじめは斜面の角度や地面の高さに足がすくんでいました。まずは大人の手を握りながら飛ぶ。「お、自分ってできるやん!」と感じた時が来ると、子どもたちから自然と「たびちゃん、もう手持たんでいいで!」「自分でやるから見てて!」「写真撮ってるだけでいいでな!」なんて言ってくれます。そこからは自分との闘いのフェーズ。遠くに飛ぶ、高く飛ぶ、飛べる姿を友達に見せ、それに刺激を受けた子どもが参加する…と「手ごたえ」を感じることができた子から遊びが広がっていきました。スリリングな体験を通して自分の限界を知り、それに向き合い、挑戦し達成感を得ることを子どもの頃にたっぷり経験できるのって大事なな…と感じるエピソードでした。

「いっぱい」を存分に楽しむ

さてさて、一部のメンズはこの時なにをしていたかというと、田んぼの中にいる冬眠から目覚めたばかりのアカハライモリに夢中でした。網を田んぼにひょいっと入れるだけでどんどん手に入るイモリたち。あれよあれよと水槽の中はイモリだらけに…黒と赤のイモリが密集する水槽は魔女が作ったスープのよう…大人は「イモリがかわいそうだからやめときなよ～」と言ってしまいそうになりますが、ここは自然保育の場、きっと子どもなりに目的があつての行動のはず…「お口はチャック、手は後ろ、耳はダンボ」でもう少し見守ってみました。



刺激が強いので白黒画像ですが、
これ、全部アカハライモリ…

メンズたちはアカハライモリをガサッと豪快に手掴みして、水槽から出しました。何をするのか見ていると、イモリたちを横一列に並べます。「ほら! まっすぐ!」「あー! ちがうちがう! こっちなんよ!」と声をかける真剣な表情。なるほど…イモリたちの徒競走が始まったのか(笑) 聞いた話を要約してみると『いっぱい捕まえたアカハライモリを競わせ、足の速いイモリを選別し、最強チームを作る!』(しかし、その先のことは特に語られず…) とのこと。なるほど…まったく意味が分からん!(笑) でもこのぶっ飛び発想、「最強」を「選別」という The 小学生男子! な遊び方、嫌いじゃない!(むしろ大好き!) その後もジップロックにイモリと水を入れ裏側を観察しては個体差の違いに気が付く…など楽しそうなメンズたちでした。アカハライモリを山盛り捕獲している時は「やめなよ…」「何考えてるんだよ…」という思いがよぎるのですが、理由を聞いてみるとその子たちなりの世界観で遊びが展開されていることに気づかされます。



水槽の壁を超える力のある
アカハライモリを厳選する少年たち

生き物探しをする子どもたちを見ていると必ずといっていいほど「いっぱい」捕りたい時期があります。生き物遊びに限らず、制作活動で使うのりや絵具の量、食事の配膳量など子どもたちが「ちょうどいい量」を獲得するにあたり「いっぱい」という感覚を知ることによって重要な役割があるように感じます。こ

れは完全に個人の体感なのですが、足りない…を経験するよりも多すぎた…を経験するほうが適量の感覚を捉えるのがスムーズな気がするのです。アカハラ男子たちも、たくさんアカハライモリと触れ合うなかで、自分たちがお世話できるキャパはどのくらいか、田んぼの中のイモリがいなくなってしまうようにどの程度で捕獲を辞めたらいいのか、自然と感じ取ることができたのでしょうか。1日の終わりには特にゴネることなくアカハライモリを逃がしていました。また、アカハラ男子の姿をずっと見ていた幼児さんはカエルを水槽に入れて、同じようにカエルレースをして遊んでいました。おもしろいことに、カエルの数は3〜4匹。「あ、大量のイモリを見てなにかこの子なりに感じるものがあつたんだろうな…」と思いを巡らせました。その季節にたくさん出会える生き物や旬の植物にいっぱい触れ合う中で磨かれる感覚が確かにあるのだなと感じることができたエピソードでした。

[預かり自然体験 dive | 滋賀県長浜市のお子様向け自然体験教室](#)

(夏以降もイベント盛りだくさんです！ぜひ、遊びに来てください！)

